

# 国際現場で活躍を希望する学生に対しての サジェッション

蔵 由美子

国際研究機関ワールドフィッシュセンター

## 1. 今の仕事内容の紹介、その困難な点と やり甲斐

私がワールドフィッシュという国際機関に勤め始めて丸10年になる。水産資源管理や農漁村の開発などを軸に貧困や飢餓の撲滅を目指す研究機関であり、アジア、アフリカ、太平洋諸島の約20カ国で活動している。2005年にカンボジアの首都プノンペンでメコン河下流域諸国を管轄する地域事務所を立ち上げることになり、それに参加することになったのが私が雇われたきっかけである。今ではメコン地域プログラムマネージャーとして、カンボジアだけでなくラオス、ベトナム、ミャンマーでのプロジェクトも担当している。

農林水産セクターの国際協力というと様々な農作物をより効率的に作り、育てるための技術や機材を途上国に提供する仕事、という印象があるかもしれないが、実際にはその業務内容は多岐に渡る。天然水産資源や水環境の保全と管理、個々の農家による作物や漁業生産を安定した現金収入につなげるための組織作り、流通販路や需要の把握、それを全般的に技術面や政策面でサポートする役割がある政府機関スタッフのキャパシティー向上や政策改善への提言など、

包括的な活動が必要である。専門知識が必要になるときもあるが、自分ひとりの知識でカバーしきれないものでもない。大抵は同僚や外部の専門家とチームを組み協働でプロジェクトを行う。しかし外国人が出来ることなど結局高が知れている。農村の現場で一番効率よく仕事出来るのは当然現地国スタッフやプロジェクトのパートナーである政府、NGO職員である。仕事に一番やりがいを感じる瞬間は、現地スタッフやプロジェクトに参加している農漁民たちが自分たちの知恵と意欲で問題に対処し、嬉しそうに報告してくれる時である。

途上国の貧困問題の本質的な解決につなげるためには、物資バラマキ型の援助ではなく、農漁民が援助依存体質にならないよう調整しつつ、最終的には彼らの自立につながるような援助でなくてはならない。私がプロジェクトを実施している国々では漁業が専業の家庭は稀で、家計を支える様々な生産活動にかかるコストや労力のバランス、そして村を取り巻く物理的、社会的環境を全体的に見て援助活動をデザインしなければいけない。新しい知識や技術を伴う生産活動を導入するときは、援助を受ける側がその活動をいかに独自で持続できるようにするかがそのプロジェクトの長期的成功の鍵となる。例

えば、稲作と養鶏の兼業農家が多い集落から魚の養殖をしたいので技術協力の要請が来たとする。既存の生計活動や家庭内の労働力、現金収支などうまくかみ合わない、あるいは物資や補助金なしでは採算が出ない生産活動は、外部のサポートが終了したとたんに立ち消えとなり、せっかく提供したスタートアップの投資も無駄になってしまうケースが多い。

「貧困」というのは複雑な問題に起因する病のようなものである。収入や資産が基本的に少なく最低限の生活基準も維持できないという場合もあれば、主要な生計手段が気候や市場の変動などの外的なリスクに対して脆弱であり、かつ外的影響への対応能力に欠ける場合、また、宗教や民族、階級などの差別のために社会的に疎外されたり不利な条件を強いられている場合などがある。開発援助活動は明確な問題の提起と根本的な原因の解明に基き、そして対症療法だけでなく病気の根源に対処するものでなくてはならない。援助する立場にある者が常に念頭に置いていなければいけないことがある。それは、貧しい人々が必ずしも不幸せであるわけではない、ということだ。いまだに時折耳にするのは、開発 NGO などがある貧しい農村に援助に入ろうとすると村人から「特に困ったことはないし何も欲しいものはない、今の生活が続けられればいい」と言われて困るという話だ。豊かで物にあふれ便利な生活に慣れすぎた自分たちの基準で途上国の現状を判断してはいけない。

どの業界でも 10 年以上働いていればそれなりに中間管理職としての仕事が増えてくる。私も研究や現場の仕事をしている時間とマネジメントやコーディネーションの時間との割合がいつの間にか入れ替わっていた。国際協力、開発

の仕事というのは決して華やかなものではない。毎日現場に出て農民と接する仕事ばかりではもちろんない。私たち外国人スタッフの役割は主に後方支援やキャパシティービルディングである。私の場合、助成金の申請書作成、ドナーとのやりとり、予算管理、進捗報告など様々な職務を複数のプロジェクトを掛持ちしながらこなさなくてはならない。国際機関の職員としての勤務には組織運営に関わるありとあらゆる雑務、例えば人事、年次事業計画、評価、さらに組織改革なども入ってくる。このあたりは一般企業と変わらないであろう。

日本人はアジアの中でも一番豊かな国の者として国際協力業界で果たす一定の役割があると思う。日本人は援助する側にありながら、される側の感情や言い分にある程度同調できる。欧米の上から目線な態度や論理的整合性を重視する価値観を押し付けられることに対する反感も理解できる。私が普段一緒に仕事をしている東南アジア人は欧米人の同僚や上司とのやり取りに不満や問題があると私に相談を持ちかけてくることもある。ほとんどの場合、文化的背景の違いやコミュニケーションの仕方に起因するものであり、根本的な意見の不一致であるとは限らない。私はそういった状況で誤解をとりたり相互理解への架け橋的な役割をすることが多く、これも自分が役に立てる機会であり、仕事の一部であると理解している。

## 2. 国際的現場に出て行くキッカケ（動機）

子供のころから外国の文化や言語に憧れていた私は、将来外国語を話せるようになり海外の国に住むのが夢だった。高校生のときに英会話

を習ったりしたが、田舎で生まれ育った私には外国人と接する機会などほとんどなかった。実際に初めて海外に出たのは大学二年の夏、イギリスに2ヶ月語学研修とホームステイした時だった。カルチャーショックと言葉が通じないフラストレーションの反面、これまで信じてきた常識や価値観がひっくり返される快感のようなものを覚えた。アルバイトでお金をためながら大学在学中にそのあと2回海外旅行をしたが、卒業旅行で行ったエジプトで貧困というものを初めて目の当たりにした。自転車に乗って観光していた私と友人はチョットとしたスラム街のような所を通ったのだがその時、8歳ぐらいの男の子が「バクシーシ、バクシーシ!」と叫びながら裸足で追いかけてきたのだ。あとで他のエジプト人に説明してもらったところ、イスラム教では豊かな者が貧しい者に施しを与えるのがあたりまえなのだ、だからその子は豊かな観光客からの施しを求めているのだと。自分は「豊かな者」の側にいるということに初めて気がついた。またトルコに行ったときは知り合ったクルド人から他民族、他宗教国家トルコの複雑な事情を聞いた。日本みたいに国民がほぼ均一化されている国のほうが珍しいのだ。

日本で四年制大学の英文科を卒業した後、私は3年あまり金融機関に勤めた。バブル経済も崩壊に差し掛かり就職活動は容易ではなかった。英語を使ったり、外国に関連した仕事にはつかなかった。職務や職場でのわずらわしい人間関係に限界を感じ、現実逃避を求め毎週図書館に通って本を読み漁っていたある日、「国際公務員になるための留学ガイド」なる本に行き当たり国連の職員になり環境問題や自然保護関連の仕事をしたと思うようになった。しかし私には

それに必要な学歴も職歴もない。勉強のし直しが必要だと気がつき、留学のための貯金と勉強(TOEFLやGRE)を始めた。知り合いに留学経験者は一人もいなかったし、推薦状を頼みに行った大学時代の教授にはやめたほうがいいといわれた。周囲にもどうせ無理だろうという空気が漂う中、アメリカの大学で環境科学政策の修士コースに授業料半額免除という奨学金付で入ることが出来た。開発とジェンダーや人類学、社会統計学など専門以外にも他に役に立ちそうな講義を色々取った。環境問題といってもゴミや危険物質の処理からエネルギー問題、森林や絶滅危惧種の保護など多種多様である。世界中で起こっている様々な問題に触れ、自分のキャリアの目的や居場所を模索しているうちに、発展途上国の開発と環境、自然資源保護の両立という問題に興味次第に集約されていった。

### 3. 学生時代に何を感じ、考え、何をしたか

アメリカでの大学院生時代は英語での講義について行き課題をこなすだけで毎日必死だった。日本の大学と違って自分のことは全て自分で考えて決めなければならず、誰もアドバイスなどしてくれない。まだ学位を習得することが国際協力の仕事につながるのか、具体的にどういった分野に進みたいのかはよくわからなかった。ただ、自分の興味分野ばかりでなく、様々な環境と開発の問題の存在を知り、それについての情報を幅広く吸収するよう勤めた。私が選んだ大学は田舎にある小規模のキャンパスで途上国からの留学生が非常に多かったことは、意図していなかったとはいえ我ながら賢い選択だったと思う。それまで途上国に住んだことが一切な

かった私は、様々な国から来ていた学生たちから学ぶことばかりだった。外国人どうしなれない英語での課題を手伝いあったりするうち、生涯を通じて付き合っていくであろう友人も何人も出来た。彼らとのネットワークは卒業後のキャリアにも非常に役に立つことになった。卒業後ワシントンDCに引っ越したばかりで仕事を探していた頃、助けてくれたのは大学院からの友人たちだった。日本人留学生のグループもいたが彼らとはあえて距離を置いた。いつも日本語ばかりしゃべってアメリカの文句ばかり言っていたからだ。

#### 4. 就職に際して、何を考え、何をしたか

私が大学を卒業した頃は、アメリカでは1年間の期限で留学生に「プラクティカルトレーニングビザ」がもらえた（注：現在はもらえないそうです）。取得した学位に関連した職場で1年間働くことが許可されるのだ。日本にすぐ帰ってもせっかく学んだ知識を生かせる仕事には就けないだろうと考えた私は、そのビザ制度を利用して首都ワシントンDCに出て仕事を探すことにした。外国人としてアメリカで、しかも競争の激しいDCで、関連した職歴もない私が仕事を探すのは非常に難しかったが、とある環境NGOに報酬なしのインターンとしてとりあえず雇ってもらえた。フィリピンとインドネシアでの住民参加型の自然保護プロジェクトの後方支援をする仕事だった。事務、広報、助成金の申請書や進捗報告書の作成など頼まれたことは何でもやった。そのうち少しずつお給料を出してもらえるようになり半年ほどたった頃、他の環境NGOで臨時の研究助手を探していると聞い

てそちらに移り、より専門的な仕事をさせてもらえるようになった。プラクティカルトレーニングビザが切れる前にフルタイムの職員のポジションにつき、正規の労働許可書を取らないことには外国人の私がアメリカで働き続けることは出来ない。研究助手の仕事をしてながら次の職を必死で探した。もう日本に帰るつもりはなかった。幾つか就職の話がまとまりかけたり、流れたりした末、World Resources Institute (WRI, 世界資源研究所) という、環境問題のシンクタンクに研究助手として雇ってもらうことが出来た。プラクティカルトレーニングビザが終了して3ヵ月後、もうアメリカを出ないといけないうギリギリの時だった。

ワシントンDCという街は誰もが何処か他のところから来ている「他所者の集まり」のようなところである。私にとっては自分が外国人であるということを忘れてしまえる居心地の良い場所だった。結局WRIで7年間、上級研究員になるまで働いた。海洋沿岸地域の環境や、漁業管理、水資源、生物多様性や湿地の保護などのプロジェクトを担当し、共同研究のパートナーとの会合や現地調査、国際会議などでアメリカ国内だけでなくヨーロッパ、東南アジア、西アフリカの様々な国に出かけていった。仕事は難しかったが刺激的で学ぶことも多く、飽きなかった。自分のキャリアの土台を積み重ねていく上でWRIのようなところでグローバルな資源管理の問題に次々と取り組み、世界中から来た有能な研究者たちと接し彼らから学べた事はこれまでもこれからも私のキャリアにとって貴重な財産になったと思う。

アメリカの労働許可書をもうこれ以上延長できないというところまで来たのできてグリーン

カード（永住許可書）を取得かというところで9.11の同時多発テロ事件が起きた。事件後の混乱した状況でグリーンカードの取得手続きにかかる年数の予測がつかなくなってしまった。シンクタンクでの仕事のペースの速さやプロジェクトごとに次々と新しいテーマや国、地域に移っていくことに疲れ、途上国の資源管理問題の根本に貧困があること、その問題に挑戦するにはひとつのテーマや地域にじっくり腰を据えて長期的にかかる必要があると感じ、アメリカを離れることにした。東南アジアの何処かに落ち着きたい、と考えたがどの国がいいか正直わからなかった。まずは短期のコンサルタントの仕事でタイのバンコクへ、そしてまた次の仕事でカンボジアのプノンペンに来た。プノンペンでワールドフィッシュの地域事務所立ち上げにコンサルタントとして参加することになり、その後正規の職員として採用となり現在に至る。

私のこれまでのキャリアの流れは、自分の実力というよりはある意味運の強さと人脈の賜物であるといえる。一つ一つ目の前の仕事を自分なりにこなしてきたという自負もあるが、私を信用して就職先を紹介してくれたり、プロジェクトを任せてくれたりした上司、同僚や友人との繋がりがやはり一番大きかったように思う。国連の職員になるという元々のゴールは次第に魅力を失っていった。求職中の頃日本の外務省が募集していた国連のジュニアプロフェッショナル派遣のプログラムに2度応募したが2回とも落とされた。今ではそれで良かったと思っている。あの時そのまま国連の官僚になっていたら私のキャリアは全く違うものになっていたであろう。

## 5. 今の学生さんへのアドバイス

大学在学中、または卒業後すぐに海外に留学した人と比べるとやや遅れをとった感はあるが、日本での会社勤めは私にとっては無駄ではなかったと思う。海外でNGOや国際機関に勤務している人々（特に欧米人）のなかには国際協力関連以外での実務経験がなく未だに学生やボランティア気質の人がいる。どんな業界に属していても基本的なビジネスマナーや事務能力を有していることは非常に有利であるし、英語で意思疎通や文書処理ができるということは基本中の基本であるが、その他のコミュニケーション能力、例えば多様な文化や価値観が飛び交いぶつかる職場において自分の意見やアイデアをうまく表現し、論理的かつ冷静に議論する能力、込入った状況を把握する能力、難局をユーモアを持って乗り切る柔軟性などは常々磨いておきたいものである。グローバルな活動が出来る人材になる、ということは欧米の価値観やビジネスモデルに迎合するということではない。世界は広いのだ。これからの国際協力は「先進国から途上国への援助」という一方向な二国間関係を基本としたモデルから多数の途上国が参加するネットワークを通じた知識、技術、情報の共有、人材の交換などへとより多様化してきている。そういった混沌とした状況において、「日本人として」というよりも「私一個人として」どのように国際協力に貢献できるかを考えながら自分のキャリアを模索してほしい。日本人としてのアイデンティティはどこにいても、どれだけ避けてもついて回る。しかし受入国のパートナーがあなたのことをその国の「名誉市民」みたいなものだ、と言ってくれるようになったらしめ

たものである。将来国際協力業界で働きたい人、あるいは自分も含めて今この業界に身を置いている人には、自分の給料が各国の政府開発援助（ODA）（注：日本だけでなく、その他欧米政府

などを含む）予算から出ているということを認識し、援助の受入国に敬意を持って、謙虚な姿勢で貧困の撲滅に挑んで欲しい。